国際交流基金日本語教育論集
第20号（2024年）　〔報告〕

協働的な学びを意識した文法授業の試み

ー「おもしろ日本語、発見！」授業の実践からー

清水まさ子・山本実佳

1. はじめに

本報告では、国際交流基金日本語国際センターで実施されている「海外日本語教師基礎研修」（以下、「基礎研修」）において、文法演習の授業の一環として行われた「おもしろ日本語、発見！」（以下、「おもしろ日本語」）という活動について報告する。

海外における日本語学習者が日本語に触れる機会は少なく（嶋津 2003）、それはノンネイティブ日本語教師も同様である。そのため基礎研修における文法授業では、訪日研修という機会を最大限に活かして、実際に生活の中で使われる文法に着目させている。木田・山本（2018）では、基礎研修における文法授業の内容を「分析的視点の育成」という観点からいくつか紹介しており、その中で「おもしろ日本語」の活動も紹介している。

本報告では木田・山本（2018）で紹介された「おもしろ日本語」の実践のうち、自律的・分析的な調査及びその発表という部分はそのままに、新たに①研修参加者に対する調査・分析への動機付けや必要な観点の紹介、②個人活動と協働的な活動との往還、③授業後のフォロー、の３点を取り入れたことを述べ、それから特に本実践の中心的な活動である①②について、研修参加者からどのように評価されたのかについて報告する。

2.「おもしろ日本語」の概要

2.1　研修における「おもしろ日本語」の位置づけ

基礎研修は、日本語教授経験１年から５年程度の若手の日本語教師を対象とした６か月の訪日研修である。JF 日本語教育スタンダードの A2～B1 前半レベルの研修参加者をＪコース（１クラス、２クラス）、B1～B2 レベルの研修参加者をＦコース（３クラス、４クラス）とし、それぞれのコースのレベルにあった授業を行っている。本実践は、このうちＦコースの研修参加者を対象とした文法演習の授業内で行われた。Ｆコースの週あたりの時間数は、１学期２学期を通して日本語科目が週13時間、教授法科目が週６時間で、このうち、日本語科目の２時間（50分×２コマ）が「文法演習」にあてられている。文法演習では、自身の運用能力向上と、教授能力向上の観点から以下の目標を定めた。

・日本語運用力の向上を支える文法知識を身につける

・既習の文法を整理し、分析的な視点を養う
・様々な授業活動を体験することを通して、文法の教え方のバリエーションを増やす

これらの目標を達成するために、文法の講義をただ聞くという授業スタイルではなく、自身で調べたりするなど学習者が自ら考えることを重視する授業を行った。授業内では、ある文法の概念図を書き、研修参加者同士で比較する活動や、ある文法項目を対象に、その使われ方を学習者自身が考えグルーピングする活動など様々な活動を試みたが、その活動の一つが、「おもしろ日本語」である。

2.2　参加者

通常は、文法演習のクラスも研修参加者の能力別に２つに分けて実施されるが、本活動は合同クラスとした。合同クラスとした理由は以下の2.3「活動の目的と流れ」を参照されたい。以下、研修参加者の国と人数を表１で示す。

表１　研修参加者の国と人数

クラス	国（人数）
３クラス	インドネシア（２）、タイ（１）、インド（１）、ウルグアイ（１）、ブラジル（１）、ウズベキスタン（１）、カザフスタン（２）、キルギス（１）、トルクメニスタン（１）
４クラス	モンゴル（１）、フィリピン（１）、ベトナム（１）、マレーシア（２）、ネパール（１）、ウクライナ（１）、ハンガリー（１）
	合計　19人

2.3　活動の目的と流れ

本実践は１学期に文法授業で学んだことを活かし、日本での生活で発見したことや気づいたことを深め、その後の生活でも観察ができるように、１学期と２学期の間の11月から12月にかけて３回（総時間数7.5時間）行った。上述した文法演習の目標のうち、分析的な視点を養うことを大きな目標とし、今回の活動の目的を以下のように研修参加者に示し、説明した。

１）日本で生活していて、気になる日本語、不思議だと感じる日本語に注目し[1]、それを収集、分析することで、言葉の観察の仕方、分析の仕方を学ぶ。そして、今後の研修の中はもちろん、帰国後に知らない言葉に出会っても、自律的に考察できる力を養成する。

２）３・４クラスを合同クラスにすることで、言葉に対するより多様な観察の仕方、分析の仕方をお互いに学ぶ。

次にこの活動の流れについて表にまとめる（表２）。縦軸に授業回数、横軸に学習者の活動と教師が行ったこと及びそのねらいについて示す。

表２　活動の内容と教師が行ったこと

授業回数	学習者の活動	教師が行ったこと／ねらい
事前課題	日本での生活、日本語の授業などで＜面白い／不思議／興味のある／意味がわからない＞日本語を考えておく	次回の授業の簡単な説明と考えておくべきことを書いたプリントを渡す
１回目 （150分）	【オリエンテーション】 １．活動の目的を知る ２．用例の集め方を知る ３．テーマ、動機などを書きだす ※ワークシート① ４．３．をもとにグループで話し合い「より良いテーマ」「調べ方」の意見を出し合う ５．４．の話し合いをもとに、テーマを深め、ワークシート①を修正する	●活動への動機を高める ・身の回りにある「おもしろ日本語」について、具体例の提示： 「日本語のポスターや看板にある省略」について考える、など ・過去のテーマの具体例を見て、興味があるものに線を引かせる ●協働１（多様な視点の発見、テーマを深める）を促す１ ・３クラス、４クラスの研修参加者が均等に分かれるようにグループ分けをする
宿題	【観察する／調べる／集める】 ６．実際に使われている例（用例）をいくつか探し、集めてくる	宿題の指示を出す
２回目 （150分）	【分析する】 ７．分析の方法を知る ８．探してきた用例を分析する ※ワークシート② ９．グループで共有し、話し合いをもとに分析を深める 10．発表の準備をする	●多角的な観点で分析できるようにする ・分析の方法のヒントを提示する ●協働２（多様な視点の発見、テーマを深める）を促す２ ・同じテーマの人達で分析を深める
３回目 （150分）	【発表する／新たな気づきを得る】 11．９．とは違うグループで収集・分析・考えたことを発表する（１人５分～10分）	●多様な視点の発見、考えを深められるようにする ・違うテーマの人達から違う視点を得られるようにする
事後課題	【まとめる】 12．発表したことや考えたことなどを簡単にまとめる	●調べ、分析したことを深められるようにする／多くのテーマに触れる機会を提供する ・レポートを提出してもらい、レポート集を作成する

3.「おもしろ日本語」の活動の特徴

本章では上記の一連の活動から、本実践における特徴的な３つの活動１）調査・分析への動機付けや必要な観点の紹介、２）個人活動と協働的な活動との往還、３）授業後のフォロー、を取り上げ、詳しく紹介する。

3.1　調査・分析への動機付けや必要な観点の紹介

第１回目と第２回目の授業の一部では、これから行う調査の動機付けや、発表テーマの見つけ方、そして多角的な分析の仕方の紹介など、課題に取り組む前の準備に時間をかけた。第１回目の授業では、身の回りにある「おもしろ日本語」への調査への動機付けを行い、第２回目の授業では、日本語を分析する際に役立つ観点を紹介した。

①第１回目授業：活動への動機を高める

第１回目の授業では、研修参加者の視点に立って、身の回りにはどのような興味深い日本語の事象があるのか例を出し、どのように調査に結び付けたらいいのか、一緒に考えていった。次は、その際に使用した PPT の一部である。

図１　授業で使用した PPT の例

この例では、最初に「日本で見かけるポスター、ちょっと気になってる。」というように、実際に講師が見つけてきたポスターを見せながら、研修参加者の立場に立った疑問をクラスに投げかけた。ここでは「すこしの勇気と優しさで」「好きな日本へ、グリーン車で。」といった最後まで言い切らない表現をいくつか見せ、ポスター等に多用される省略を紹介し、日常に感じる些細な日本語についての興味・疑問が発表テーマにつながることを示した。また興味があったら、写真やネットでどんな例があるか探すことも調査の一つとなることも同時に伝え、調査や発表に対する「気軽さ」「楽しさ」を提示した。

②第２回目授業：多角的な観点で分析できるようにする

第２回目の授業では、各自が興味を持ったテーマについて、どのように調査していけばいいのか、調査・分析をする際に役立つ観点を紹介した。ここでは紹介した観点の中から以下の３つを示し、なぜこれらを紹介したのか、その意図も示す。

a）調査対象の実際の用いられ方を調べてみる。

b）似た機能を持つ用例同士をグループにわけてみる。

c）調査対象の前後の語に注目してみる。

a）は、その調査対象が実際に日常生活の中でどのように使われているのかという観点の紹介である。例えば、自身の調査対象語は世代間で使用傾向が異なるのか、どんな場所で（例：駅で／雑誌で）使われているのか、どのような方法で表現されている（話し言葉／書き言葉等）のか、といった点を調べる方法もあることを紹介した。研修参加者は普段、国では主に教科書中心に日本語を教えたり学んだりしている。今回の訪日研修を活かして、実際に言葉がどう社会と結びついているのか知ってほしいという思いから、このような点を分析の観点の一つとして紹介した。

b）では調査対象についての用例を集めた後に、似た機能を持つ用例同士をグループにまとめて、どのような使用傾向があるのかといった分析の仕方を紹介した。例として野田他（2017：34）をもとに、雑誌に出てくるカタカナ語（例：オトナ／ワクワク／バッチリなど）を各自の基準でグループにわけて、それらのグループに意味づけをするタスクを行った。この「おもしろ日本語」の授業以前にも、文法の授業では、学習目標となる文法表現の意味／機能を自ら考えて、グループにわかれ使われ方の傾向を見るという探索的な学びを行っている。今回は、今までの文法授業で培ってきたこのような分析の手法を、自身の調査にも活かしてもらおうと明示的に紹介した。

c）では、例えば「走る」という言葉がどう使われているのか知りたいとき、「走る」ばかりに注目するのではなく、その前後の語にも注目し使用傾向を見る方法もあるという提案をした。調査したい表現があると、その表現ばかりに注目してしまい、品詞や意味だけを辞書で調べて終わりというケースもある。しかし実際に表現や語は、文や文章の中で使われている。その語だけではなく、前後の文脈の中でどう使われているのか、それにも注目してほしいと思い、このような分析方法を紹介した。

3.2　個人活動と協働的な活動との往還

本実践では、個人で調査テーマを設定し調査を行うことにしたが、発表までの途中経過においては、今まで各自が考えたことや調査したことをグループでコメントしあう協働的な活動を行った。グループ活動は発表を含め3回行ったが、それぞれの話し合いでの目的や形態は異なる。以下、それぞれの話し合いの詳細を述べる。

①第1回目授業での協働1：テーマを決める

第1回目の授業前に、事前課題として「日本での生活、日本語の授業などで＜面白い／不思議／興味のある／意味がわからない＞日本語を考えておく」という課題を出した。

おもしろ日本語、発見！　活動シート①テーマを考える

1．調べたいテーマ
2．このテーマを選んだ理由
3．調べたい内容
4．そのために何を調べるか
5．どうやって調べるか
メモ

図２　ワークシート①

授業では、まずグループで話し合う前に、考えてきた事前課題をワークシート①（図２）に各自まとめさせた。

それから３～４人のグループになり、テーマについて話し合う時間を設けた。この時点では、講師側では各自の希望テーマが把握できておらず、また研修参加者もテーマを絞りきれていなかった。そのため講師側でグループを決めることなく、グループ編成には自由度をもたせた。

グループ活動の際、出した指示としては、１）できるだけ３・４クラスが混合になるようにグループを作る、２）司会を決める、３）一人ずつ考えてきた自分のテーマと動機、どんなことを調べたいかを発表し、それについて他の人はコメントする、４）コメントする際は相手が「より良いテーマ・調べ方」になるようなコメントを行う、という４点である。

話し合い後、ワークシート①を再度使用し、話し合いを参考にワークシートに内容を追加・修正してもいいことを伝え、内容を見直す時間をとった。その後、各自のテーマを講師側で把握するためにワークシートは提出させた。

②第２回目授業での協働２：調査経過を共有する

第１回目の宿題として、調査の途中経過をワークシート②（図３）にまとめさせ、３～４人のグループで話し合う時間を設けた。今回のグループは前回提出させたワークシート①のテーマをもとに、講師側で類似したテーマ同士の研修参加者をグループにするようにした。これは類似したテーマ同士で、調査の分析や考察で悩んでいる点を相談したり、アイデアを出しあうためである。またグループに研修参加者を配置する際には、普段の文法授業では意見の交換をしあわない３・４クラスの研修参加者を積極的に混合させることで、考え方や意見の多様性を図った。

③発表での話し合い

３回目の調査発表の時間は、クラスをいくつかのグループにわけ、そのグループ内での発表とした。

木田・山本（2018）ではクラス全体の前で一人ずつ発表させていたが、今回はその実践時よ

おもしろ日本語、発見！　活動シート②分析する

1．調べたテーマ
2．このテーマを選んだ理由
3．調べたこと（用例）
4．どうやって調べたか
5．分析（考えたこと）
★話し合いで気づいたこと、考えたこと

図３　ワークシート②

りもクラスサイズが大きく、一人ずつ発表させた場合、時間がかかり、積極的な意見交換がなかなかしづらいと考えられた。また今回は授業の目標として「言葉に対するより多様な観察の仕方、分析の仕方をお互いに学ぶ」という目標を掲げているため、発表内容を広くクラスの皆に伝えるというよりは、多数の視点を話し合いによって得ることのほうが重要であると考えた。そのため４～５人の少人数編成のグループで発表させた。第２回目での発表では同じテーマ同士の者をグループにしたが、今回はより多様な考え方に触れさせるために、テーマの異なる者同士で、３・４クラスを混合させる形とした。

発表されたテーマをグループ別にまとめたのが表３である。

表３　発表のグループとテーマ

グループ番号	テーマ
1	若者の言葉（ミ形）、ことばのゆれ（関西方言） 規格やルールの日本語、LINE のスタンプ、ベトナム語に訳せない奥深い日本語
2	サラリーマン川柳、『かわいい』の使い方、『やばい』について、助詞『へ』と『ニ』の違い、場所の名称に使われている「を」
3	役割語（方言と男性ことば）、料理の名前、オタクの言葉、だじゃれ
4	ポケモンの名前の作り方、洋画のタイトルにおけるカタカナ語、川柳、い形容詞のバリエーション、ゲームの中にある関西弁

グループごとに各小教室にわかれ、一人10分程度発表し、質疑応答は５分程度とした。質疑応答時には、発表でのよかった点や、こんな考え方もあるということを聞き手が積極的に出すように指示した。

以上の個人活動と協働的な活動との往還をまとめると、以下のような活動デザインとなる（図４）。

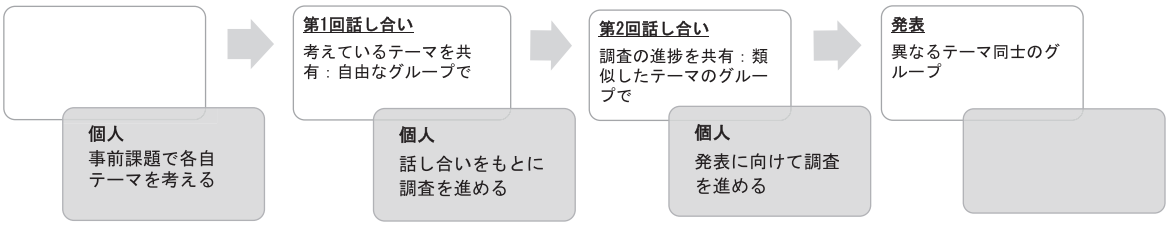

図４　本実践の活動デザイン

個人で作業をする時間と、グループで考えてきたことを披露しあう協働的な活動の時間を繰り返すことで、調査の途中でも一人よがりの考え方や手法を防げ、他者からいろいろな視点を得ることができるようにした。

3.3　授業後のフォロー

発表後は、Ａ４用紙１～２枚程度で、各自調査したことをまとめるレポート課題を出した。全員分のレポートをまとめて、「おもしろ日本語、発見！レポート集」として、研修参加者に配付した。配付の目的としては、今回、発表を少人数としたことにより、他の人の発表を知りたかったという声が聞かれたからである。

また、提出されたレポートを返却する際には、講師のコメントも入れて返却を行った。コメントを行う際には、例えば考察の仕方には、他にこんな考え方もあるといった視点の提示や、調査方法や考察に不備があれば、その点について指摘し、わかりにくかった旨を伝えたりした。

4.「おもしろ日本語」の評価と課題

授業後に、本実践の中心的な活動であった①調査・分析への動機付けや必要な観点の紹介、②個人活動と協働的な活動との往還、の２つの活動に対してどの程度満足したか、また話し合いで自分の考えが深められたか等のアンケート調査を実施し、19名中17名から回答を得た。質問項目と回答の結果を以下にまとめる。

１）活動（全３回）に満足したか

（５：大変満足した　４：まあまあ満足した　３：どちらでもない　２：あまり満足しなかった　１：満足しなかった）

表４　活動の満足度

5	4	3	2	1
9 （53%）	8 （47%）	0	0	0

5段階評価で4、5と回答したのは17名（100％）で[2]、この活動に対して高い満足度を得ていることがわかる。研修参加者がなぜそのように評価したのか、自由に記述させたところ、以下のような①～③の理由が挙げられた。

①個人の興味の探求

・面白いや不思議だなとおもうことをほかの人に伝える機会がなかなかない。こういう小さい発見をシェアできるので満足した。

・自分自身が興味を持っていることについて研究ができて、楽しみながら準備ができた。

・知りたい事について情報を集めたり調べたりするのは効果的な練習だ。

②他の人との協働

・１回目と２回目のクラスでグループで相談して、いいインプットをもらった。

・クラスメートの発表を聞くのも楽しくて、勉強になった。

・２回目のグループでの話し合いから学びが多かった。

・他の人と意見交換をしたので、新しいアイデアを生み出した。

③新たな発見

・当たり前の日本語から、色々な教材ができると気づいた。教科書だけではなく、学生にもっと身近なものも勉強になるのがポイントだ。

・グループの皆さんの発表を聞いて、たくさんの面白いことを知った。

記述からは、①個人の興味の探求、②他の人との協働、そして③新たな発見ができたことが満足度への評価につながっていることがわかった。これは、3.1の「調査・分析への動機付けや必要な観点の紹介」の中の、活動への動機を高めるための仕掛けがうまく機能したこと、また、個人活動と協働的な活動の往還によるデザインが評価されたと言ってよいだろう。アンケートでは、目標の一つである多様な視点を得、テーマを深めるために行った中間発表での話し合いについても聞いた。以下、評価をまとめる。

２）中間発表での話し合いで自分の考えは深められたか

（５：大変深められた　４：まあまあ深められた　３：どちらでもない　２：あまり深められなかった　１：深められなかった）

表５　話し合いで考えを深められたか

5	4	3	2	1
6 (35%)	9 (53%)	1 (6%)	1 (6%)	0

5段階評価で、「大変深められた」「まあまあ深められた」と回答したのは15名（88％）であった。深められたと考えた理由としては、①似ているテーマで話し合ったことで気づきがあったこと、②多角的な視点で見ることで、アイデアなどが広がったことについて評価していることがわかる。

①似ているテーマで話し合ったことでの気づき

・似ているテーマの研修生たちと話したあと、自分の発表に足りないものや、説明をもう少し加えたらいいところなどを気づくことができた。このおかげで発表の内容と流れをもっとはっきりになった。

・テーマが似ているクラスメートと相談できたので、役に立てるアドバイスがたくさんあった。

②多角的な視点とアイデアの広がり

・色々なテーマで、様々な分析と分類の仕方が習えた。

・調査方法を参考にしたいアイデアがあった。またグループメンバーからの質問に答えながら、調査を深めることができた。

・自分で気づけないことを、他の人は外から見ると気づける。背景知識も違って、新しいアイデアとか、アドバイスをしやすい。

以上のことから、この活動で意識した動機を高めるための仕掛けが、自分自身の興味のあることや身近なことも分析の対象になることへの気づきを促し、そして、話し合いを通して、多角的な視点で分析できるようになったと感じていることがわかる。つまり、この活動の目標である1）日本で生活していて、気になる日本語、不思議だと感じる日本語に注目し、それを収集、分析することで、言葉の観察の仕方、分析の仕方を学ぶこと、2）3・4クラス合同にすることで、言葉に対するより多様な観察の仕方、分析の仕方をお互いに学ぶことは達成できたものと思われる。

一方で、課題も明らかになった。1つ目はテーマを選択する時間がもう少し必要だったといった時間の不足について、2つ目は自由なグループで実施した第1回の話し合いの際に、自分のテーマについて他の研修参加者が知らなかったため、うまく意見交換ができなかったといった話し合いの方法の不備についてである。

今回は週に1回150分で、全3回というコンパクトなサイズでの実施となったが、調査時間や自身で調べてきたことを整理する時間などにもう少し時間をかけることができると、よりじっくりとテーマを深めることができるかもしれない。また、話し合いについては概ね好評ではあったが、上述したような意見交換に関する問題も聞かれたため、グループ内で相談をする

際には、自身が相談したい内容をどのようにうまく伝えるかや、話し合いを深めるための質問の仕方などを、ケーススタディ等を用いて考えさせる必要があるだろう。

5. まとめ

本実践は、日本の生活において普段研修参加者が感じている日本語の疑問や興味について、個人的に調査・分析し発表するものである。発表までのプロセスにおいて、個人的な活動のみに終始させず、分析前に分析の仕方をいくつか紹介したり、グループで個々人の調査した分析について話し合う協働的な活動を組み込んだりした。研修参加者のアンケート結果からも、言葉の基礎的な分析の仕方や多角的な視点を得ることができたと考えられる。

基礎研修の研修参加者は、6か月の研修が終わり次第、帰国し、また各自の現場に戻る。帰国後に同じような授業活動はできないことがほとんどであろうが、この活動の目的である、自分で発見して分析して考えていくという過程や、多様な視点を協働によって得られた経験は、各自の現場にも活かせるのではないかと考える。

〔注〕

(1) ここでいう「気になる日本語、不思議だと感じる日本語」とは、文法項目に限らず、学習者の興味や疑問に応じて方言や語彙または省略なども含む。

(2) 評価は5段階評価としたが、研修参加者が4.5と記入したものは5に含めた。

〔参考文献〕

木田真理・山本実佳（2018）「日本語の分析能力を養う中・上級文法授業の試み－外国人日本語教師研修における実践－」『国際交流基金日本語教育紀要』14、35-49

嶋津拓（2003）「海外の日本語学習者への支援－国際交流基金関西国際センターの現場から(1)　海外の日本語学習者の現状と日本語学習者支援の課題」『日本語学』22(1)、86-94

野田尚史・野田春美（2017）『日本語を分析するレッスン：アクティブ・ラーニング対応』、大修館書店

■執筆者

清　水　まさ子　　国際交流基金日本語国際センター専任講師

山　本　実　佳　　国際交流基金日本語国際センター専任講師